託孤帰命に導かれ（その1）―武田松姫の生涯―

細野 哲弘
独立行政法人 石油天然ガス金属鉱物資源機構 理事長
（元 特許庁長官　元資源エネルギー庁長官）

天正10年（1582年）2月末、織田信忠は5万の軍勢を率いて、伊那の高遠城を包囲していた。信濃伊那口から攻め込み、既に松尾城、飯田城を落とし、または帰順させ、高遠城を攻略すれば、新府城に依る武田勝頼[1]を完全に孤立させることのできる重要な局面であった。立て籠る守兵はわずか2千5百。兵を周到に布陣させながら、それでも信忠が時間を費やしたのは、父信長から、「今の武田勢にあって唯一油断のならないのが、高遠城主の仁科五郎盛信[2]である。心して掛かれ。」との指示を受けていたからであるが、もう一つ理由があった。高遠城に盛信の妹の松姫が身を寄せているとの消息があり、その真相、安否を確認したかったのである。松姫は信忠の元許嫁で、このあと述べていく経緯で家と家との関係では破談となっていたが、信忠にとっては断ち切れぬ想いを持ち続けた相手であった。

仁科盛信甲冑像（伊那市高遠町歴史博物館）

信忠から城中の盛信に使者（寺僧）が立てられた。盛信に時勢を説き、盛信の武勇を惜しんで降伏を促すものであった。盛信は敢然とこれを拒否する口上を伝えるとともに、一旦奥に下がりわざわざその覚悟を自筆で書面で認め、「二度とかかる手管を弄するな」と言い含めて使者に持ち帰らせている。しかし、なぜか、その使者は復命ののち再び城に赴くのだが、盛信は二度と来るなと申したはずだと激昂し、使者の口上を聞かぬうちに耳をそぎ落とし、馬にくくりつけて送り返したとされている。

不思議なやりとりである。真相は不明であるが、このあと信忠は踏ん切りがついたかのように3月2日を期して総攻撃に移り、城を攻め落としている。覚悟の盛信は奮戦ののち、夫人と共に自刃。享年26歳。さらに陣を進めた織田勢が勝頼を新府城から追い落とし、天目山において遂に武田家を滅亡に至らせたのは、3月11日のことである。

織田信長と武田信玄とは、直接対決こそ殆どなかったが、ある意味において、戦国時代の世代交代を象徴する代表敵手であった。だからと言って、別

1）武田勝頼は信玄の四男で、信玄が征服した諏訪頼重の娘（諏訪御寮人）との間に生まれた庶子であるが、今川義元を継いだ氏真の妹を母とする嫡男義信が廃嫡されて、武田の世子となった。

2）仁科盛信は武田信玄の五男で信濃国安曇郡の領主仁科氏を継承し、仁科氏の通字である「盛」の偏諱を受け継ぎ、本拠の森城と併せ高遠城を主宰した。一説によれば、信玄の素養を最も受け継いだ武将といわれ、武勇だけでなく治政にも優れ、領民に慕われた。高遠城落城後、首級は京都に送られ一条通辻に晒されたが、胴体は領民により手厚く葬られた。江戸時代後年、高遠藩主となった内藤家により城内法堂院曲輪に祀られた。なお、長野県歌「信濃の国」（浅井冽（れつ）作詞）の五番歌詞にも、仁科の五郎盛信は「旭将軍義仲、春台太宰先生、象山佐久間先生」と並んで「この国の人にして文武の誉れ類なく、山に聳（そび）えて世に仰ぎ、川と流れて名は尽きず」と謳われ、今なお親しまれている。

に武田信玄が「因習」と言っているのではない。彼は、この時期の戦国大名の多くのように下克上で成り上がったのではなく、清和源氏の流れをくむ代々守護大名を務める名門の一族である。領内の統治においても、信玄堤に代表されるような優れた業績を残している。最終的には、両勢力は長篠（設楽ガ原）の戦において時代的な明暗を分けることになるのであるが、それは信玄後の話。

その前の段階では、13歳という年齢差や実績において信玄が戦国武将として圧倒的に存在感のある先輩格である。信玄から見ると、上杉謙信との雌雄をつけるために時間を費やしているうちに、尾張から信長という「若造が伸して」きて、「容易ならざるやつが出てきた」とは思ったかもしれないが、「まずはすぐに敵にならないような関係にしておく」対象であったのではなかろうか。また、信長にしても、信玄には一目も二目も置くとともに、今川義元のように直接蹂躙にかかって来ないうちは穏便に事を構えず、美濃以西の政略に専念したい時期であった。

こういう場合には、権謀術数を秘めた政略的友好関係の取り結びとして婚姻関係が採用された。それは趣旨からいって、領主同士の「家」としての政治的判断がすべてであり、本人の意向などというものは最初から考慮されなかった。また、それぞれの「家を背負った」息子と娘でさえあれば、実子であろうが猶子であろうが、年齢も大した問題ではなかった。従って、たくさんの悲喜劇が展開されたのだが、この時期の織田―武田の苛烈な権謀の渦の中にあって、意外なほどに純粋な恋愛物語があった。

織田と武田との縁組は二重に構築された。まず信長は、永禄8年（1565年）11月に姪（妹婿である遠山友勝の娘）を養女にして、信玄の嫡男勝頼に嫁がせ、続いて信玄の五女松姫を信長の嫡男奇妙丸（のちの信忠）の嫁として迎えるという構想である。時に松姫7歳、奇妙丸11歳であった。永禄10年（1567年）12月に、結納の品が岐阜の信長から躑躅ヶ崎の信玄・松姫宛に送られた。当時としては破格の進物が用意された。祝儀の酒樽、肴のほか、父信玄への進物としては、虎の皮3枚、豹の皮5枚、緞子100巻、鞍と鎧10口。松姫には、厚板（厚地織物）、薄板、緯白（紫の縦糸、白の横糸の織物）、織紅梅（紫の縦糸、紅の横糸の織物）が各100反ずつ、帯300

躑躅が崎（甲府市）

武田信玄像（甲府駅南口）

武田信玄公火葬塚（甲府市）

筋、銭1000貫と言うモノであった。これに対して明けて永禄11年（1568年）6月には、信玄から岐阜への返礼が届けられた。信長には、蝋燭（越後有明）3000張、漆1000桶、熊の皮1000枚、馬11頭。奇妙丸には、大安吉の脇差、郷義弘の太刀、紅1000斤、綿1000把であった。昔から、結納では新婦側への品を立派にする傾向にあるが、それにしても織田側の意気込みが感じられる。武田側からの返品はやや地味であるが、甲斐は駿馬の産地であり、信長は贈られた馬に大層喜んだとされる。

当時、織田信長と徳川家康（松平元康改め）とは同盟関係にあり、家康と信玄との間には近い将来の北条領（遠江、駿河）を巡る領有密約がなされており、この松姫・奇妙丸の婚姻約束は甲信二国から三河・遠江・駿河の東海を経て濃尾二国までを包含する大勢力圏の実現を予感させるモノであった。

さても、7歳と11歳の婚約である。現代の感覚では「ままごと夫婦」であるが、当時としても早い決め事であった。しかし、二人は頻繁に手紙文や贈り物のやりとりをして、幼いながらもお互いに微笑ましく想いを膨らませていった。「どうして貴方の名前は奇妙丸なの？」みたいなやりとりであったらしい。

武田側でも、輿入れまでは織田への預かりものであるとの認識で、松姫のために躑躅ヶ崎の一画に建物を拵え、松姫はその館で過ごした。新館御料人（御寮人）と呼ばれた。

しかし、政略で結ばれた関係は、政略の変化に翻弄される運命にあった。勝頼に嫁いだ信長の養娘（のちに龍勝院と称される）は長男の信勝を出産したものの、元亀2年（1571年）9月に病死してしまう。更に、翌元亀3年（1572年）12月、信玄が浜松城の北の追分に進出し、徳川軍と交戦したことが大きな結節点になった。この戦いは、「三方ヶ原の戦い」と言われ、城で迎え撃つつもりだった家康は信玄の誘いに乗って城外に撃って出て、生涯忘れえぬほどに完膚なきまで叩きのめされ、命からがら城に逃げ帰る決定的な敗北を喫するのである。問題は、その家康の後方支援に同盟関係にある織田の軍勢が加わっており、平手汎秀など織田の有力武将が武田軍に討ち取られたことから、武田と織田との関係が微妙になり、松姫と奇妙丸の婚約が「なし崩し的」に沙汰止みになってしまったのである。なし崩しというのはあとで述べるように正式に破談通告をするような状況ではなく、若い（幼い）二人にとっては、何かが急に変わったと言うより、戸惑いの方が大きかったのかも知れない。この間の事情を記す記録は乏しいが、その後も双方に非公式な音信が暫く継続された気配がある。

その後、政局は目まぐるしく展開した。時間が少々遡るが、織田や徳川（松平）が勃興するもっと前の時期に、武田信玄（甲斐）、北条氏康（相模）、今川義元（駿河）は婚姻関係を結び同盟関係にあった。比較的それが安定的に機能したのは、それぞれが関心を持って対応したい戦略の向く方向が異なり、それを背後から脅かされない体制を作ることに意味があったのである。武田は信濃に、北条は関東平野内部に、そして今川は遠江、三河に勢力分布を広げることに優先度が高かった。それが、相応の成果をあげつつも、当主の代替わりによりその治世者・武略家として実力の均衡が崩れると、たちまちのうちに関係が流動化した。義元が桶狭間に斃れた後を襲った今川氏真、氏康の病死後を受け継いだ北条氏政などの器量、力量を見定めた信玄は、川中島を5回戦って上杉との目処をつけると、大きく動き始める。俗に「西上作戦」と称される進軍である。元亀3年（1572年）重臣の山県昌景と秋山虎繁（信友）に3千の兵をもって三河から浜松方面に侵攻させる[3]とともに、自らは2万2千の軍勢を率いて遠江に侵入した。

この頃までは信長と信玄との関係は依然良好で、将軍家からの意向を受けて信長が信玄と謙信との和睦などの中立をしたとの記録がある。しかし、信玄が青崩峠を越えて、遠江の徳川領に侵攻し、一言坂で徳川勢を蹴散らし、破竹の勢いで二俣、浜松あたりまで席巻して、前述のように三方ヶ原で家康と正面衝突をするに至って、遂に織田、武田両家の間には深刻な亀裂が生ずるに至った。

ところが、これに続く三河の野田城の攻略中に武田軍の動きが急に止まる。そして突如甲府に退却を始めた。陣中で信玄が倒れ、以西への進軍どころではなくなったのである。信玄は帰路、駒場（現 阿智村）で息を引き取る。元亀4年（1573年）4月12日。肺結核とも癌とも言われている。享年53歳。

信玄西上作戦関係図（野田城から駒場に至る退却経路は不明）

3）秋山虎繁はその後東美濃の岩村城攻略にも当たっている。その経緯や女城主おつやの方との物語は本誌286号「五の次は六」を参照。

信玄が「西上作戦」の途上で陣没しなければ、その後の戦国絵巻は変わっていたのではという「if」談義がある。確かに、その戦闘能力・勢力は当時の信長や家康を上回っていたかもしれず、もし「西上作戦」のままに実際に激突していたら、所謂「長篠の戦い」に2年ほど先立つこの時期なら、武田が勝っていた可能性はあると思われる。場合により、そのまま上洛を果たしたかもしれない。ただ、清和源氏の流れを組む名家だからといって、それによって「武田の天下」になったかといえば、筆者は懐疑的である。この点は、既に本誌の信長を扱った別稿[4]で述べたように、信長の「天下取り」にはそうなるべくして用意された信長特有の要素が沢山あり、信玄のそれとは異なると思うからである。本稿の主題から外れるので、深入りはしないが、当時の戦国大名が悉(ことごと)く「天下取り」を目指していたわけではないし、そもそも「天下取り（天下布武）」は発想からして信長の専売特許みたいなところがある。一旦やられてみれば、第三者をして「そうかそういう手もあるか」と思わせる側面はあるにせよ、誰もができる仕業(しわざ)ではなかった。

ちょっと横道に逸れたので、話を戻したい。

信玄という偉大な柱を失った武田家は四郎勝頼によって継承され、依然として大きな勢力を保持したが、「喪を秘して動くな」との信玄の遺訓は結論的に言えば遵守されなかった。残念ながら闘将の素養はあっても知略の将ではなかった勝頼が、重臣たちの諫言(いさめ)を聞かずに長篠の戦い（天正3年（1575年）5月）で織田・徳川連合軍に大敗するや、鉄壁の団結を誇った武田軍団に深刻な分裂が生じ、凋落の坂を転げ落ちていったのは周知の通りである。

設楽ヶ原（長篠）での決戦で、土屋昌次、馬場信春、山県昌景、内藤昌豊、原昌胤、真田信綱・昌輝兄弟などの歴代の賢臣・強者(つわもの)を、また、本戦に先立つ鳶ノ巣砦(とびのすとりで)の攻防などでは、河窪信実・三枝昌貞（守友）、高坂昌澄などを失った。防御を高めるため新たに造った新府城[5]に依るも、離反する家臣を遂に束ねきれなかった。勝頼は、寄せ来る織田軍に押され新城をも捨てて天目山に至り、少数の家族、家臣と共に最期を迎えることとなったのは冒頭に記した通りである[6]。

目まぐるしく政局を追ってきたが、松姫、奇妙丸の婚約から10数年が経過していた。織田家との手切れになってからも、松姫は奇妙丸の妻になるとの思いを失わず、他から持ちかけられた縁談を顧みることもなく22歳を迎えていた。勝頼が新府城に移るに際して躑躅ヶ崎の館を焼き払ったため、松姫のための新館もなくなってしまった。致し方なく、松姫も新府城に移ったのであるが、それを不憫(ふびん)に思った兄で生母を同じくして仲の良かった五郎盛信が、彼女を高遠城に誘(いざな)い、このとき以来松姫はこの城に住まわっていた。

高遠城／問屋門

4) 本誌285～288号の「信長シリーズ」のうち、「弾正忠家の台所」と「是非に及ばず」に信長成功のいくつかの要因を記述したつもりであり、「下天のうちを比らぶれば」では信長の世界観にも触れているので、ご関心の向きは参照頂きたい。要すれば、武略もさることながら時代に即した経済的な実力が重要であり、その経済力に裏打ちされた常備軍の整備、兵備・用兵の革新、京へのロジスティックや京でのポリティクス（対皇室、将軍家、公家、寺社）の構築などが大事であったということである。

この「西上作戦」についても、将軍義昭からの信長討伐の「御教書」に応じた上洛という説と、周辺地域への勢力拡大が主眼であったとする説がある。乱発された御教書はともかく、行軍の真意については、筆者は後説に近いと思う。

5) 元々甲斐武田の本拠は躑躅ヶ崎の館である。守護大名から戦国大名に転化した経緯もあるのか、この本拠は殆ど防御の設（しつらえ）がなかった。領内深くまで攻め込まれるという想定の館ではなかった。平常の行政用の庁舎として機能し、いざというときには国境からの狼煙合図とともに館の北3kmほどのところにある要害山という山城に籠ればいいという塩梅であった。「人は城、人は石垣、人は堀、情けは味方、仇は敵」の歌そのままの居城であった。当然攻められるに際しては脆弱であり、勝頼は北部の韮崎の台地に新城（新府城）を築いたものの、家臣団の離反に見舞われた勝頼は「情けは味方、仇は敵」の意味をかみしめることになった。

6) 勝頼の死をもって武田滅亡とされるが、天目山で最期を迎えるに際し、勝頼は16歳の嫡男信勝に「環甲の礼（甲州を統治する地位を継承する儀式）」を俄（にわか）に行っている。信勝は早くに亡くなった信長の姪を母とする世子である。勝頼が、自分の代で一族が滅ぶのは忍びないと思ったか、世子に死花を飾らせようとしたのかは不明であるが、正確には信勝の死によって武田は滅んだ。

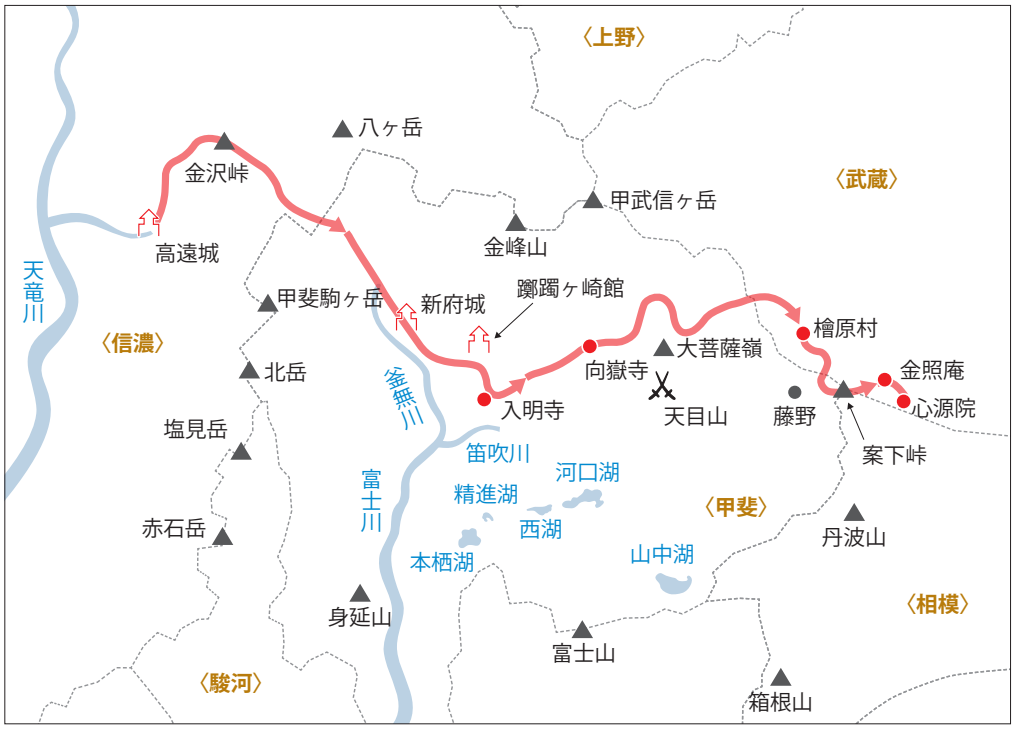
その高遠城目掛けて攻め来るのが、なお淡い思いを捨てきれないでいた信忠であるというのは、松姫にとっては胸裂ける思いであったろう。しかし、誇り高き武田の女である。かかる巡り合わせも武家の女の定めと思い切った。離反や逃散（ちょうさん）が止まらない家中にあっても、武田の矜持の象徴たる盛信を慕って、最後の決戦に馳せ参じる気骨の者どもも少なくなかった。

彼らと運命を共にする覚悟を定めた松姫であったが、盛信はそれを許さなかった。「我らはここに武田の意地を見せて果てる覚悟だが、そなたは死んではならぬ。我が娘督姫ともども落ち延びて武田の血を繋いで欲しい。」と説き伏せた。幼い姪を包み込むように輿に抱いて、後ろ髪引かれる思いで松姫が高遠城を出たのは、信忠軍が武田の城を落としつつ北上し、いよいよ高遠城に迫り来る半月ほど前であった。

松姫像（八王子市：金龍山信松院　門の傍らにある小振りの像である。）

途中、新府城に立ち寄った折、四郎勝頼からは娘の貞姫を、そして重臣小山田信茂の娘香具姫をも託され、道中は幼い女子3人連れとなった[7]。

新府城（韮崎）からは、甲州街道を少し東に下り生母油川（あぶらかわ）夫人の故郷東油川を経て川中島宿場を越え、山梨郡塩山を目指した。塩山の向嶽寺で暫く様子を見るうちに五郎盛信、四郎勝頼の悲報に接し、愈々（いよいよ）容易でない事態を察し、未だ雪の残る山道に踏み入れた。探索の目を掻（か）い潜り、少人数の供侍、侍女に守られてゆく道中の苦労は並大抵ではなかった。追手や途中の詮索を避け、主街道を取らず山路に分け入って、塩山から大菩薩嶺を北に迂回して、藤野を目指した。四郎勝頼の正室が北条氏の出であること、北条氏政の妻（黄梅院）が松姫の姉である



松姫逃避行図

7）落ち延びる際に新府城に赴いたあと、松姫は古府中（甲府）の入明寺に武田信親を訪れている。信親は信玄の正室三条夫人腹の次男であったが生まれつき盲目であったことから早くから出家し（法名龍宝）、躑躅ヶ崎北の館から移りこの寺にあった。信親は、長兄義信亡きあと、信玄の息子では最年長であった。生母は異なるが、松姫の別れの訪問を大層喜び、その道行を励まして武田の血を繋ぐ祈りを捧げて送り出した。天目山で勝頼自刃の知らせを受けるや、後を追って割腹自害した。

ことの血縁、地縁を頼って、案下峠（相模からの呼び名は「和田峠」）を越えて武蔵に入り、横山宿（八王子）恩方村に辿り着いたのは3月の下旬のことであった。高遠城を出て1ヶ月半余ののちであった。最初、金照庵という小さな寺に依ったが、その後、北条家当主氏政の弟でこの地にあった北条氏照の口利きで、彼が師事する卜山禅師（随翁舜悦仏国照禅師）の心源院に移り、一行は漸くにして腰を落ち着けることのできる地を得ることとなった。

心源院（八王子市上恩方）

亡くなった武田一族の供養をしつつ、改めて幼い姪や重臣の娘の養育に思案を始めた松姫であったが、その松姫に北条氏照を通じて、思いもかけぬ知らせが届く。「やっと、そなたを見つけた。ぜひ正室に迎え入れたい。」という申し入れであった。高遠城攻めの際、盛信とのやり取りで既に松姫が落ち延びたことは分かっていたが、その後の消息が絶えたその行方を追い、漸くに松姫の居場所を突きとめた信忠が認（したた）めたものであった。

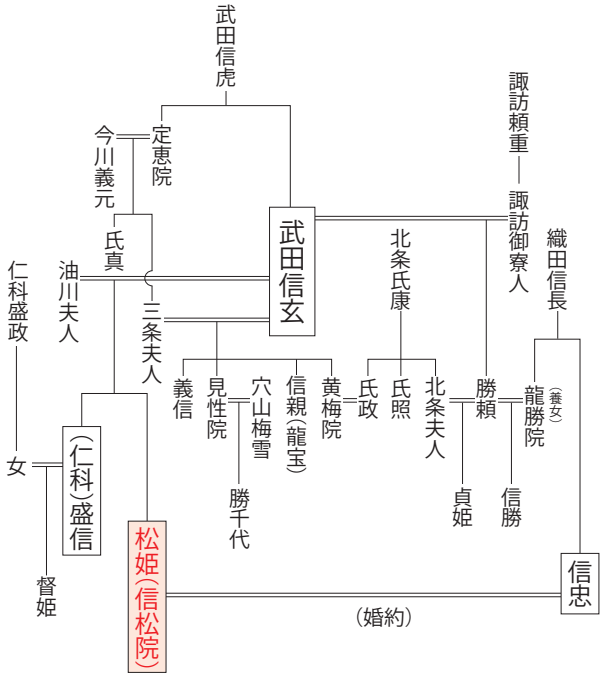
愛（いと）しく思い続けてきた相手ではあるが、一族を攻め滅ぼした相手でもある男からの信じられない申し出に、松姫は愛憎の狭間で煩悶した。しかし、既に政略的には何ら意味のない身を、なおも希求してくれる信忠の情愛にうたれた松姫は、遂に信忠の求めに応える決断をする。

だが、運命は何処までも過酷であった。浮き立つ気持ちを抑えきれず信忠の元に向かわんとする松姫にもたらされたのは、信忠が信長ともども本能寺の変により世を去ったとの悲痛な知らせであった。

婚約後の二人のやり取り、想いについては、史実ははっきりと物語ってくれない。しかし、三方ヶ原の戦いで武田軍が織田からの派遣軍と交戦したことから軍事的には「縁切り」状態にはなったものの、それに続く信玄の死という混乱の中で縁談をどうこうするとの明示的に仕切りがあったわけではない。まさに、婚約は「なし崩し」的なまま推移していた。信忠は信長から織田家を正式に承継した当主であるにもかかわらず、側室は迎えたものの、ついに正室を娶らなかった[8]。一方、松姫の方はといえば、婚約した以上、添うのは奇妙丸（信忠）だけと思い定め、あまたある縁談に見向きせぬままに時を重ねて一族の滅亡に至った。最終的に一族の菩提（ぼだい）を弔うために卜山禅師の得度で髪を下すのであるが、その時期は1582年秋、つまり本能寺の変での信忠の死を知った後であった。

これら諸々の状況を勘案すると、時空を超えて双方に秘めたる想いが持続していたかもしれないと推量するのも、強（あなが）ち故なきことではなかろう。信忠最期の知らせに接し、松姫は「まだ見ぬ許嫁（いいなずけ）の心の叫びを聴いた」かもしれないなどと記述することは想像が逞（たくま）しすぎるだろうか。

松姫は正式に髪を下ろして尼僧「信松禅尼」となった後、卜山禅師の勧めで独立の庵を近くの御所



松姫関係系図

8）織田家の家系譜には、信忠室は「武田大膳太夫信玄入道女」とある。

水の里に結び、そこを終いの棲家に定めた。

これでもって身の定めを思い知り、一族の菩提を弔うべく、世間とのつながりを断って仏門に入り静かに一生を送った……ということなら、悲恋、悲運の薄幸姫の切ない物語で終わりである。数少ない記録にも、「生まれて容色志操あり、(略)、居止言行孤孀の者の如し」(信松院由緒記)とあるにはある。

でも、どっこい、そうでないのが松姫様なのである。

ここからの松姫の物語には、二つのポイントになる要素がある。一つが養蚕、もう一つが徳川家との縁である。いずれも落ち着いた地である八王子に関係する。

信松院像(金龍山信松院のパンフレットより)

まず、養蚕の話。心源院に身を寄せて以降、何くれとなく北条から支援の届く生活ではあったが、落ち延びた一行の将来を考えると、周りの好意だけに頼ってばかりでは不安があった。名家の出ではあっても、一族の盛衰を経験し、況んや今は亡き兄達や重臣から託された3人の幼な子を抱える身の上である。世の儚さには敏感であった。実際、支援をしてくれていた北条は暫くののち秀吉に降り、その助けは途絶えることとなるのである。そうした気持ちから、松姫は当座は周りの村の子供達に読み書きを教えるなど自立の道を探り始める。武家の嗜みの読み書きの指導はその優しい人柄もあって好評であり、御所水の里の村人との距離をグッと縮めるのに大いに役立った。しかし、田舎での束脩や謝礼代わりの野菜などだけでは、慎ましい暮らしとはいえ、一行全ての費えを賄うには程遠かった。読み書きはともかく、金銭を扱ったことも、売り買いの術も格別の技術もない「お姫様の一行」である。さて、いかんせん?

思案の末に松姫が目をつけたのは、八王子の周りで盛んであった養蚕とその生糸を用いた織物であった。武家の女子として、奥での布、着物の扱いには馴染みがあるとはいえ、玩具の繭玉が蚕と関係があることは勿論、養蚕の「よ」の字も知らない姫様には、決して低くない敷居であった。その彼女の背中を押したのが、初めて見る農家の屋根裏の蚕棚への興味と一行の住まいに出入りする蚕に詳しい土地の女たちの存在であった。蛾の幼虫である蚕が卵から孵って四度の脱皮を経て、糸を引いて繭の中で蛹になるまでの過程を一から学び、桑の栽培、刈り取り、桑の与え方、蚕棚の掃除などさまざまな知識と作業を学んでいった。そのための蚕具と呼ばれる作業具などは近所の老夫婦の農家のものを譲って貰うなどして凌ぎつつ、糸の染色までも学んだ。流石に、染色は奥が深く度々失敗を重ねた。一方、手を広げれば広げるほど一連の作業を一行だけでは捌くことが難しくなったが、周りの村人や後で述べる「千人同心」のおかみさんたちを賃仕事で雇うなどの新機軸を立ち上げ、徐々に事業を軌道に乗せていった。

最終的には、機織り機なども導入して現在の「八王子織」の基となる絹織物の基礎を築いたのであるが、これには多くの元手と伝が必要であり、また生糸が市況品であるため、その価格下落など不測の損害などに見舞われることも少なくなかった。こうした元手資金の確保や市況の不安定さに耐えることを裏から支えたのが、武田由縁の大久保長安であり、「千人同心」たちであった。

大久保たちの貢献を語るには、背景の説明が要る。そして、ここから徐々に、もう一つの徳川家との縁の話題に移っていく。

徳川家は、武田家を滅ぼす先鋒ではあったが、家康は武将として信玄を畏敬し、軍団の実力にも一目置いていた。のちに「井伊の赤備え[9]」として有名になった彦根井伊家の軍装は、赤で統一した甲冑、旗

9)「赤備え」は、甲斐武田軍団の代名詞であり、「精鋭部隊」と同義であった。徳川期に井伊家が継承したが、大坂夏の陣で真田信繁(幸村)も部隊を赤備えで編成した。

指物で戦場を席巻した武田軍団の飯富虎昌（おぶとらまさ）のものを復活させたものである。

また、家康は武田遺臣にも優しかった。多くの武田遺臣を保護して、家臣に加えている（天正壬午起請文）。それは、幼い頃人質として苦労した自らの経験もあり、武士にとっては自らのアイデンティティの元となるものの存在や矜持が必要であることを、そしてそれが主人を失った遺臣にはとりわけ大切であることを、彼が身に染みてよくわかっていたからである。

甲州をその傘下に収めた家康にとって、そこと江戸との連絡のためにも、また甲州の金山からの算出金の輸送のためにも、八王子近辺は要地であった。そこの抑えに、家康は積極的に武田の遺臣を召し抱えた。当初は二百五十人程度であった同人組織であったが、徐々に増員され慶長4年（1599年）には「八王子千人同心[10]」となった。現在の八王子市にも「千人町」の地名と屋敷跡碑が残る。彼らにとって、近くの御所水の里の庵に棲み武田一族の菩提を弔う美貌の松姫（信松尼）の存在は、まさに「心の拠り所」であった。彼らは、主家への尊崇の念を絶やさず、なにくれと気配り、支援を怠らなかった。また、大久保長安[11]も元武田の家臣である。武田滅亡後、その手腕を家康に見出されて八王子一帯の総代官に任じられ、松姫には有形無形の支援を惜しまなかった。特に、養蚕、染色から織物作りに松姫が乗り出すに際して、機織り機材の整備など、ここぞという纏（まとま）った資金の入用な局面で大きく寄与（バックアップ）した。

（上）八王子千人同心の碑（八王子市千人町）
（下）組頭の家（小金井市 江戸東京たてもの園）

新しく関東の主となった家康は、大久保や千人同心を介してこのような形で松姫との繋がりを醸したのであるが、徳川家と松姫との縁はこれだけではなかった。

少し時代が下るが、家康の後を襲職した将軍秀忠には、正室於江与の方[12]には秘密の子息があった。名前を幸松と言って、秀忠の乳母（めのと）に仕える志津（静）という侍女に産ませた男子である。於江与の方の手前、将軍の子としては育てられない身の上であったが、老中土井利勝らの周旋で市井で密かに養育されることになった。そして、その後見に松姫の姉である見性院が当たることとなり、その見性院が手助けとして頼ったのが松姫であった。

---

10) 八王子における同心は、関ヶ原の戦いを前にして、代官頭大久保長安の発案で500人から1000人に増員して「八王子千人同心」となった。慶長5年（1600年）の会津征伐に参戦し、関ヶ原の戦いでは徳川家康の長柄頭を担当している。その後、日光脇街道、甲州街道の整備・警護に当たり、幕末には蝦夷地の警護にも当たった。慶応4年（1868年）東征軍に降伏した後解散した。八王子にはいくつかの史跡が残り、心源院の境内の木門の手前にも、小谷田小寅の碑文がある。千人同心に所属し、医術に長けていたとされる。

11) 大久保長安は、春日大社の金春流の流れを組む猿楽師を父に持ち、信玄の時代に見出され、家老の与力として家臣に連なった。武田時代は金山の開発などに携わったが、武田滅亡後は家康に仕え、その後大久保忠隣の与力に任ぜられ、その際に姓を賜ってそれまでの大蔵から大久保となった。釜無川、笛吹川などの堤防修復、金山整備などに功績があり、のちに石見銀山、佐渡金山をも統括する実力者となった。外様としては異例の出世をし、関東代官頭、美濃代官なども兼任し、開幕後は従五位下石見守に叙せられ、勘定奉行、年寄（のちの老中）として活躍した。

12) 於江与の方は、信長の妹お市の方と浅井長政の間に生まれた三姉妹の末っ子。大層、誇り高く恪気も強く、秀忠に側室を置くことを許さなかった。幸松誕生は「夫の将軍をも牛耳る正室（かかあでんか）の沽券に関わる」とばかりに、誕生後の母子への詮索の手を緩めず、母子には幾たびかの危機があった。しかし、踏み込んだ追っ手を前にした見性院の「この児はこの見性院が養子にした。もはや武田の児じゃ。一切の手出し無用。」と言い放つなどした機転がこれを救った。ここでは「機転」と記したが、下記（注13）の経緯もあり、武田の家名には執着があり、本音でもあったのではなかろうか。

13) 穴山信君（梅雪）は武田の御一門に連なる譜代の家老で、「武田二十四将」の一人。今川との外交を担当して重きをなしたが、勝頼とは戦略上の対立があり、長篠の戦いの前に織田・徳川に通じた。見性院との間に勝千代を設けたが、勝千代は天正15年（1587年）15歳で疱瘡により死去。これにより、穴山家は途絶えたが、家康は五男信吉（生母は武田家臣秋山氏の娘於都摩の方）に武田姓（穴山）を継がせた。その後、佐倉10万石、常陸25万石に封じられたが、残念ながら、継嗣がなく武田姓は再び途絶えた。

この見性院なる女性、彼女も家康と因縁があった。実は彼女の嫁した武田の宿将穴山信君（梅雪）[13]という人物がのちに家康に仕え、あの本能寺の変の折に家康とともに堺にあり、決死の逃避行を余儀なくされた一行の一人であった。残念ながら、途中で二手に分かれたのが仇になり、梅雪は横死してしまうのであるが、家康は残されたその夫人（出家して見性院）を保護し、江戸城北の丸に邸居（やしき）を与えていた。

信玄の二番目の娘である見性院は大層毅然とした女丈夫であった。土井利勝からの幸松養育の依頼を「徳川は武田には仇かも知れぬが、時代も移り今度は、その仇を恩でお返しするのも面白かろう」と敢然と受けた。ただ、67歳という年齢と北の丸に住居があるという立場から、幸松の養育にはどうしても市井での信頼できる助けが必要であった。幸松母子は見性院の采地である武蔵国大牧村に移った。

松姫は、見性院の期待に応え、徳川の血を引く幸松が数え歳で七才になり、奇しくも高遠城を居城とする保科家に養子に迎えられる前の年まで、懇（ねんご）ろに愛情深く養育し、教育に心を砕いた。慎ましく生きること、人との信義を重んじ、周りの人に慈しみを持って接することの大切さを説いた。幸松もこの二人の尼僧に大層馴染んで、その庇護のもと健やかで情緒深く幼年期を送ったとされている。

松姫（信松尼）がこの世を去ったのは、元和2年（1616年）4月16日[14]。享年56歳。心を尽くした幸松の成長を見守りつつ、眠るような最期であったとされている。法名は信松院殿月峰永琴大禅定尼である。御所水の里の庵はその後「金龍山信松院[15]」として整備され、今日に至っている。

最後に、松姫が養育した三人の姫たちのことを付記しておきたい。勝頼娘の貞姫は、下野国足利郡に知行を持ち足利氏の流れを組む高家とされる宮原義久に嫁した。小山田信茂の娘香具姫は、小山田が最後の段階で武田から離反したため、婚姻に際し「裏切り者の娘」の汚名が災いしたが、最終的に上総佐貫の徳川譜代の内藤忠興に、側室ではあったが輿入れが叶った。いずれも武家の夫人として子宝に恵まれ、平穏な一生を送った。ただ、兄盛信の娘督姫は、当初から病がちで体が弱く、早い段階で仏門に入ることを決意（得度し「生弐尼」と称した）。松姫の庵とは別に、近くの横山宿北に草庵を結んで修行の道に入ったが、29歳をもって逝去。

金龍山信松院（八王子市台町）

これらの縁組、督姫の得度や別の草庵の用意に当たっても、大久保長安が骨を折った。

敬愛する兄盛信や武田当主の勝頼から託された「生き延びて武田所縁（ゆかり）の姫たちを頼む」の願いに応えて奮闘尽力し、そして遂に見（まみ）えることのなかった許嫁信忠への想いを胸に秘め、さらには武田から徳川に繋がる不思議な縁（えにし）を紡いで、松姫（信松院）は一生を終えた。

保護すべき対象がありながら、その立場にある者がそれを全うできぬ無念を込めて他の者にその願い、役割を託すことを「託孤」又は「託孤帰命」という。松姫の生涯は「託孤帰命」に導かれた清純で気高き物語（ドラマ）であった。そして、その紡（つむ）がれた「託孤」の糸は20年を経て静かに織りなされ、徳川の治世に再び登場することになる。それは次稿でということとしたい。

14) 松姫が没したまさに翌日に、家康も駿府にて死去。のちに、日光東照宮に祀られたが、その警備に当たったのが八王子の千人同心であった。こんなところにも、巡り合わせを感じる。

15) 金龍山信松院は、八王子市台町の「松姫街道」と「南大通り」の交差する角にある。門を入った左側に御所の水に移る前に一時身を寄せた庵に因んだ「金照庵」というカフェがあり、そこで「松姫もなか」という小振りの菓子を楽しむことができる。製造販売元は八王子駅近く（明神町）にある。

松姫もなか